青梅市文化財ニュース

第２９６号

平成２４年６月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

市内に生息するハゼ科魚類

「青梅でハゼ？」と思われますが４種類ほど、ハゼ科の魚類が生息しています。一般にハゼは汽水域や内湾の砂泥底に生息し、その代表的な魚が、天ぷらでお馴染みの「マハゼ」です。また、小型のハゼ類を「ゴリ」と呼ぶ地域が多く、佃煮などのゴリ料理として利用されています。ゴリの語源は、河口から「五里（約 20ｋｍ）」溯上するためと言われ、主に下流域に生息していることを示しています。

ハゼの仲間は、一部、遊泳型もいますが、一般には底性で水底近くで活動します。ハゼ科の形態的特徴として、腹ビレが吸盤状に変化しているものが多く、岩棚の上などに止まり易い様になっています。水槽飼育では、ガラス面に腹ビレをキスゴムの様に使って張り付くことが出来ます。川を溯上する際も、腹ビレを石に吸着させて、水に流されない様にしています。

写真１　ヌマチチブ ♂

写真２　吸盤状の腹ビレ

市内に生息しているハゼ科の１つに「ヌマチチブ」（写真１、２）という魚がいます。近縁種の「チチブ」は、主に河川の下流域や汽水域に生息していて、マハゼ釣りの下道として知られています。関東では「ダボハゼ」と呼ばれ、すぐに釣られてしまう（騙される、引っかかる）事の代名詞となっている魚です。

ヌマチチブは、北海道～九州に分布しており、河川の中流～下流域に生息しています。チチブよりやや上流側にいて、チチブ同様「ダボハゼ」と呼ばれています。大きさは、青梅市内の代表的な魚類である「カジカ」とほぼ同じ 12～15cm で体型も良く似ているので、気が付かない方が多い様です。丸くて大きな頭に、体はずんぐりしており、色は茶褐色で、頭の側面には白くて大きな斑点が、まば

らに存在します。体にも同様の斑紋が、ウロコに沿って不連続に入り乱れて並びます。胸ビレの基部は黄土色の横帯があり、中央に橙赤色の線が走ります。

ヌマチチブは泥底にも生息しますが、本来は岩や倒木、杭などの堅い基底がある場所や礫底を好みます。流れの緩やかな所に多くいます。雑食性で水生昆虫や小魚、そして付着藻類も食べます。

産卵期は、春～夏で雄は体全体が黒くなり、胸ビレの基底は青白色になり、橙赤色の線も消え、頭部の白色斑は淡青色の小さな点に変わります。また第１背ビレの先は糸状に伸びます。雌の体は白っぽくなり、背ビレは伸びません。

雄は水底の石、コンクリート、木片などの下側になわばりを持ち、雌を誘って産卵させます。卵は石の下面の他、側面や上面にも産み付けられることがあります。大きさは１㎜ほどで、雄が卵を守り、10 日程でフ化します。

基本的には、川で産卵し仔魚は海に降りて再び溯上する両側回遊魚ですが、降海せずに一生を川で過ごすものもあります。

産卵期以外にも、自分の生息場所を中心になわばりを作り他魚の侵入を防ぎます。攻撃性が強いので、他魚と一緒に水槽飼育は出来ません。

佃煮が美味で、天ぷら、吸い物として利用されます。

次に「ジュズカケハゼ」（写真３）という魚が河辺地区から下流、昭島市付近までの間に生息しています。北海道～九州に分布し、大きさは５～６㎝です。近縁種の「ビリンゴ」は汽水域～海で生活しますが、本種は一生を淡水域で過ごします。

ジュズカケハゼは、河川の中～下流域に棲み、湧水のある砂泥底を好みます。完全な底性ではなく、底から離れて中層を“ホバーリング”したり、水草などの間も良く泳ぎます。体側に暗色横帯があります。

産卵期は５～６月、礫の下面に穴を堀り、雌が雄に求愛した後、巣穴に入り礫の下面に産卵します。雄が卵を守ります。

婚姻色は雄よりも雌に強く現れ、背ビレ、尻ビレ、腹ビレが黒化し、腹側には黄色と褐色の横帯が明瞭となります。

浮遊性や底生性の小動物を食べます。性格は、とてもおとなしい魚です。近年は河川改修などにより、生息場所が狭められており、都内では絶滅が危惧されています。

その他、「ヨシノボリ」が生息し、稀に「ウキゴリ」も見つかりますが、青梅市内のハゼ科魚類の生息数は、とても少ないので、大切に見守ってやりたいと思います。　　（文責　大久保　芳木）

写真３　ジュズカケハゼ